えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第100号
平成29年
(2017)
11 － 12

江戸東京博物館友の会会報

目次

会報『えど友』100 号の歩み ……1～2
『えど友』100 号記念投稿「東京風景いまむかし」
「広重の描いた浅草寺」／「消えていく銅板建築」…… 3
えど友広小路……4～5
会員からの投稿「『江戸名所図会』ミステーク」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
第9回えど友研究発表会…… 6
友の会セミナー「錦絵とかわら版にみる、お江戸の時事」‥ 7
学習会「荒川区立荒川ふるさと文化館を訪ねる」…… 8
えどはく探訪　ワークショップ「江戸時代の版木で自分だけの江戸からかみを摺ってみよう!」…… 8
えど東京一景(7)－旧細川侯爵邸(和敬塾本館)－……9
江戸博クリップ　「江戸博の成長」……9
江戸名所図会を歩く…㉞［内藤新宿から永固山一行院］‥10
友の会カードは休館中でもこんなに使える！ ……11
催事案内 ……12

会報『えど友』100号の歩み

『えど友』は本号で100号を迎えました。平成13年5月19日に行われた江戸博友の会設立総会を伝える創刊号が発刊されたのは、その年の7月のことでした。創刊号の名称は『友の会会報』、そこから『えど友』が100号を迎えるまで、どんな変遷があったのでしょうか。最初に会報を始めたのはどういう方たちなのか、どんなふうに現在の『えど友』になってきたのか、創刊当時のころをご存じの先輩方のお話も伺い、振り返ってみました。

『えど友』創刊のいきさつ

江戸東京博物館が開館したのは平成5年3月28日でした。同10年8月からはガイドボランティア制度が本格的に実施されます。その翌年に友の会設立準備委員会が設立され、平成12年には友の会の発起人の募集が始まります。この発起人会が友の会の基軸となって同13年4月から一般会員の募集が始まり、5月の設立総会へと進みました。

友の会ができれば会報を作ろうということになるのは自然な流れです。発足時の会員数は577人、そのすべての会員をつなぐのは会報しかありません。

何事も最初はどこからどう手を付けるか、手探り状態でした。初めは友の会の担当となった館の学芸員が主導して、友の会を引っ張っていってくれたのです。会報は広報部会が作成しますが、そのメンバーはどのように集まったのでしょうか。まず、全会員を対象に友の会の運営を手伝ってくれる会員を募り、それに応じて集まった人たちが話し合って事業部会、広報部会、総務部会と3つの部会がつくられました。広報部会にはそのとき、5人のメンバーが入って会報の作成が始まったのです。

友の会会報
創刊号
平成13年
2001
7
友の会が盛大にスタート
5月19日、設立総会開催される

当初は事務局もなく、もちろん事務員もいないので、担当学芸員は館のアルバイトの方に、友の会の事務仕事を依頼していたといいます。友の会ができたことによって発生する費用、細かいことでは封筒や切手代などすべてを館にもらいに行っていたそうですから広報部会以前に、友の会全体の始まりは苦労の連続であったことが想像できます。

会報の始まり

さて、集まった5人で始まった広報部会の最初はどんな感じだったのでしょう。その頃友の会はまだ部会で使える部屋が定まっていませんでした。楽屋の裏の部屋や事務棟の7階の部屋を借りたり、7階にあった喫茶店の一隅で部会を開いたりしたこともあるといいますから、現在の地下の部屋を使えるようになるまでは場所の確保が大きな問題でした。

友の会の運営が軌道に乗って会員

も徐々に増え、安定的に会費が入って予算が組まれ、事業部会の催事が定期的に行われるようになるまでは、会報の中身も試行錯誤の連続だったのではないでしょうか。

広報部会に入った最初の５人は、全員が何らかの形で編集関係や広報関係の仕事に就いていた方たちでした。創刊号の会報名は『友の会会報』。その「まんま」ですね。次の第２号で会報の愛称を公募し、第５号の会報から名称が『えど友』となりました。創刊以来、頁数や発行回数などは一定していませんでしたが、平成

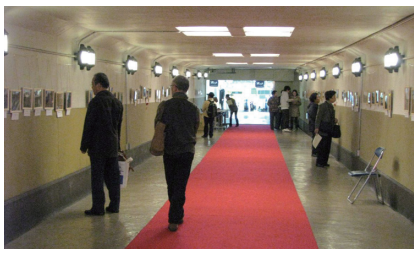
14年１月発行の第５号からは２カ月に一度の定期発行となり、頁数は同16年１月の第17号から12頁が定着しました。取材したり記事を書いたりは全員で分担、その中で、パソコンの技術と編集ソフトを持つ部会員が全体のレイアウトや版下作成などを担当しました。印刷だけが外注でした。

現在のように、レイアウト作成のために外部の制作会社を使いはじめたのは平成17年５月発行の第25号からです。「えど友」のロゴマークも「DF 勘亭流」という書体を元に加工され、江戸風になりました。その前年にはレイアウトを担当していた部会員が退会したため、それまで

の半年間は素人同然のメンバーがパソコンで作った原稿を手作業の切り貼りでレイアウトをするなど苦労したそうです。

会報のリニューアル

筆者が広報部会に入ったのは平成21年の12月で、翌22年の第54号から奥付に名前が載るようになりました。一番広報部会員が多かったころです。友の会10周年記念事業の概要がトップ記事で報じられています。様々な記念事業に広報部会も「会員が選ぶ東京新百景」の写真コンテストを企画し、両国駅構内で展覧会まで開催したことが思い出されます。



その後、誌面のマンネリ化対策を検討するためのプロジェクトチームが立ち上げられ、そのチームを中心として全部会員で内容の検討を行いました。新編集方針は平成24年５月の第67号から反映されました。全体としての『えど友』の評価は催事に参加した会員に対するアンケート結果から、大きな変容は望まれていないということが分かっていました。そのため、全体のイメージはあまり変えずに、トップ記事を広報部会員の取材による独自記事にしました。それまでは館の特別展を取り上げることが多かったので、これが一番大きな違いといえます。後半の街歩き企画記事も「落語で江戸散歩」から「江戸名所図会を歩く」に替わりました。この時、平成14年９月に開設されていた友の会ホームページも一新され、全体のデザインを変えて創刊号からの『えど友』の掲載をはじめ、友の会の様々な情報提供、江戸東京の幅広い情報などを載せるようになりました。

平成25年７月発行の第74号からは編集長が代わり、同時に表紙の江戸博のロゴが公募で決まった総務部会の藤井文乃さんデザインによる友

の会のロゴに変わりました。第78号からweb版のえど友誌面掲載の写真をカラーで掲載。この後、紙版の『えど友』でもカラー化を図るべく地の紙の色を含めて一部カラー印刷などを試しつつ、平成27年１月の第83号からは紙版もweb版も全頁カラー化が達成されました。さらに読みやすく、楽しい会報を目指して少しずつ変化をしています。

これからの『えど友』

来年３月まで江戸博は休館で、その後１年間は館の施設を使えないため、催事の会場確保が難しい状況です。友の会の催事が減ると必然、会報に反映させる記事が減ることになります。今は広報部会員全員でその穴をどう埋めるか頭を悩ませ、知恵を絞っているところです。しかし、広報部会員だけで会報『えど友』は作れません。会報には「えど友広小路」の会員投稿欄や、現在募集中の『えど友』100号記念投稿「東京風景いまむかし」の企画など、会員の皆さんの発信の場があります。今後の『えど友』の継続・発展のために、会報作りへの積極的な参加をお待ちしています。

文：広報部会・中村貞子
写真：同・福島信一

『えど友』100 号記念投稿

「東京風景いまむかし」

広重の描いた浅草寺

中山　徹

東京の有名な名所のひとつ浅草。今も多くの観光客がここを訪れ、様々な国の言葉が飛び交い、いつも活気で満ちています。その浅草を象徴する場所といえば、何といっても浅草寺です。そして浅草寺にお参りする大多数の人は雷門を通るでしょう。私も雷門をくぐる瞬間は江戸時代にタイムスリップするような感覚にとらわれ、わくわくします。

そしてこの雷門を目にしたとき、いつも頭に浮かぶ浮世絵があります。歌川広重の『名所江戸百景』のひとつ「浅草金龍山」です。雷門の下から赤い大提灯越しに正面には仁王門、右側には現代では左側に建つ五重塔を描いたもので、全体は雪景色となっています。雪景色の中の浅草寺を私は見たことはありませんが、全体は赤と白を基調としたきれいな色合いでとても好きな浮世絵のひとつです。この浮世絵を見れば、当然ながら冬をイメージしますし、冬の寒い日に広重は筆を執っていたことを想像するでしょう。しかしこの絵は夏に描かれていたことを知り、その意外さに驚きました。

原信田実氏の『謎解き　広重「江戸百」』によれば、この浮世絵に記された改印から安政３年７月に出版許可を得ていたことが分かるとしています。７月は旧暦では秋ではありますが、まだ江戸の町も暑かったことでしょう。暑い最中に冬景色を描く広重の創造力にはあらためて頭の下がる思いがしますが、原信田氏はこれにはひとつのメッセージが込められていたとしています。

出版許可を得た前年の安政２年10月２日に江戸で大地震が発生しました。安政江戸大地震です。この地震では多くの家屋が倒壊し、１万人にのぼる死者が出るなど江戸の町に甚大な被害をもたらしました。また地震直後に発行された「浅草寺大塔解釈」という摺り物には五重塔のてっぺんにある九輪が曲がっている絵も描かれています。これほどの大地震は当時の江戸の人たちには大変な衝撃であったことは容易に想像できますが、その直後に描かれた広重の「浅草金龍山」には雪の中、穏やかに境内を歩く人々が見られ、曲がってしまった九輪もまっすぐに描かれています。これを震災から復興が進んだことを世に示し、赤と白を基調とした絵で祝う意味が込められていたとしているのです。広重からのメッセージを胸に、「浅草金龍山」を思い描きながら浅草寺を訪れると、今も昔も震災から立ち直る私たち日本人の力強さをあらためて感じさせられます。

消えていく銅板建築

大橋　弘依

品川のある事柄についてネット検索していた時のことです。「銅板建築という歴史的に貴重な建物がこのあたりに多数あった」とあり、写真もいくつか紹介されていました。子どもの頃買い物をしていた青果店の写真などもあり、畳屋を営んでいた友人の家もこういう造りだったことを思い出しました。

看板建築ともいわれるそうで、関東大震災の後、東京で多数造られました。２階建ての店舗兼住宅の正面のみを銅板やモルタルで洋風にしつらえて、その部分に職人が意匠をこらした装飾を施していました。当然ですが老朽化して次々と姿を消しています。

品川の旧東海道近くに、廃業したうなぎ屋の店舗を活用した銅板建築のイタリアン居酒屋「居残り連」があります。想像通り店名は品川宿が舞台の落語「居残り佐平次」から名付けられたとのこと。６月の第１日曜日はこの地域の例大祭なので訪ねてみましたが、独特の緑色が懐かしさを感じさせる佇まいでした。また、藤森江戸博館長が「看板建築」の名付け親だということも最近知りました。

会員からの投稿

『江戸名所図会』ミステーク

吉川政雄

『江戸名所図会』輪読会会員で毎月楽しませてもらっている。但し、自分の発表当番になると、楽しみは消えその準備に何回も読み返したり、現地調査に出掛けたりもする。テキストは原書のコピーと、活字版である角川文庫のコピーである。古文書といっても、版本は地方文書と異なり比較的らくに読めるが、読めない文字は文庫本に助けてもらう。

何回も読んでいると本の間違いに気づくこともある。大概は文庫本の脚注で訂正されているのだが、たまに脚注にも指摘されていない間違いを発見することもある。こんな時は何故か無性にうれしくなってしまう。(性格悪い！と言わないで……笑)

一例を紹介しよう。第十三冊の、中730頁は、吉水山宗慶寺(文京区小石川)を取り上げているが、その8行目に ～境内に越後少将の御母公阿茶の御方の廟所あり、宗慶寺の号は阿茶御方の法号による所なり～ という記述があるが、「阿茶の御方」は間違いで正しいのは、「茶阿の御方」である。家康は一字違いで、上下逆にした名前を付けたので、後世の我々は「アチャー！」と紛らわしく、これが「アジャーパー」という流行語のルーツになったのか？と、チャチャを入れたくなる。冗談はさておき、二人とも歴史に名を残した女性たちだった。先に側室になった「阿茶局」は、大変聡明で関ヶ原の戦いにも随行した。大坂冬の陣では和議の使いで大役を果たした。家康亡き後は髪を下ろす事を許されず、2代将軍秀忠にも仕えるよう命じられ、秀忠の娘、和子が御水尾天皇に輿入れする際には母親代わりを勤め、従一位を授けられた。

一方「茶阿局」は大変美貌だったそうで、家康の六男、忠輝を生んだ。忠輝は順調に出世し、越後60万石の大名になり、越後少将と呼ばれたが、不行跡で改易されてしまった。母親は、息子の身を案じながら亡くなったが、この時の法号「宗慶大禅定尼」が寺名となった。忠輝の妻は伊達政宗の娘、五郎八姫である。伊達政宗は男子に恵まれなかったので、娘婿に大きな期待をしたらしい。

ここで索引に気づき引いてみた。「ウン！　阿茶局がもう1カ所ある」深川のお寺で、「雲光院」だ。阿茶局の法号は「雲光院殿周栄大姉」と出ている。さらに茶阿局と同じように未亡人だ。家康は「後家キラーか？」この箇所は、2、3年先に輪読する所だろう。だがとても待てやしねー　早速探検に行ってこなくちゃー……。

『江戸名所図会』がミスし、編集者や校訂・校注の著者たちもお目こぼしされたお陰で、私は退屈しない。この先も歴史の面白さを面白がりたい。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

8月16日(水)月番は島田昭さん。お江戸両国亭で「女流講談なでしこくらぶ」を鑑賞した。演目は、宝井琴柑「大久保彦左衛門　盥の登城」、神田こなぎ「出世証文」、田辺一邑「妲妃のお百重吉の因果」、神田織音・神田すみれご両人による「怪談乳房榎」であった。リズミカルな話芸の妙味を堪能した。参加者14人。

9月26日(火)9月の例会は、落語の舞台となった場所を散策する予定であったが、月番が所用のため、代わりに柳家三代(三三、小三治、小さん)のＤＶＤ鑑賞を行った。三三は37歳に演じた「万両婿」、小三治は47歳に演じた「船徳」、小さんは64歳に演じた「宿屋の富」を鑑賞した。参加者12人。

◆藩史研究会

8月1日(火)えど友研究発表会があり、藩史研究会会員の土屋献一郎さんの研究発表「江戸の繁栄を築いた利根川東遷について」を聴講した。藩史研会員は例会の出席扱いとした。参加者15人。

9月8日(金)皆で調べる学習会として埼玉県上尾市の原市藩を取り上げた。國定美津子さん、荒井和雄さんが持ち寄った資料を中心に話し合った。譜代の西尾氏が2代にわたり、天正18年(1590)から元和4年(1618)までの28年間治めた藩で西尾氏移封後は廃藩となり天領となった。参加者10人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

8月25日(金)米屋久右衛門の「日記」を読む。明治4年4月1日～4月28日。江戸から上総までの飛脚便を大手飛脚問屋が合併してできた陸送会社から営業範囲外といわれ、他の問屋へ持ち込むが急便は届けかねると2カ所で断られる。翌日、また別の問屋を探しやっと引き受けてもらうことができた。東海道筋は発達しているが、飛脚も地方便は扱うところも便数も限られていた様子が伺える。参加者8人。

9月14日(木)明治4年4月29日～5月29日。参加者9人。

9月29日(金)明治4年5月30日～6月21日。布告により人別委細取調書提出のため、藩へ紹介した中間や自家の使用人などについて宿元への問い合わせに忙しい。参加者9人。

◆江戸東京を巡る会

8月・9月 休会。

◆『江戸名所図会』輪読会

8月 休会。

9月21日(木)担当は清水昌紘さん。今回は板橋区の赤塚明神祠、十羅刹女宮、千葉家古城跡、そして埼玉県和光市に入る吹上観音堂の4カ所。そのうち赤塚明神祠、十羅刹女宮は現在何も残っていない。十羅刹女宮の別当で神仏分離令により廃寺

となった常福寺に伝わっていた「田遊びの祭り」について図会には詳しい記述がある。この祭りは現在、赤塚諏訪神社で行われており、昭和51年、国の重要無形文化財に指定された。千葉自胤が築城した赤塚城は典型的な平山城で、現在は赤塚城趾として板橋区史跡に指定され、周囲は都立公園として整備されているが、本丸跡を示す石碑の他は空壕などの遺構がわずかに残るのみである。参加者17人。

◆日本の大道芸伝承会

8月9日(水)がまの油売り、玉すだれ、地獄極楽などこれまで伝わる大道芸と絵解き口上を練習。参加者3人。

9月13日(水)深川江戸資料館主催の9月16日(土)にある「江戸の物売りと大道芸」へ出演するための準備。玉すだれ、地獄極楽など。参加者3人。

◆江戸を語る会

8月26日(土)伊東敏男さんが「隅田川と落語」の演題で発表した。隅田川にかかる橋で人が渡れるものは26橋とのこと。江戸時代に建設された千住大橋、両国橋、新大橋、永代橋、吾妻橋も含め、その中の名だたる17橋にまつわる、ないしは各橋の地区に関連した有名な落語を挙げ、それらの噺のさわりや逸話を話された。参加者7人。

◆かっぽれの会

8月・9月 休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

8月27日(日)江戸博学習室にて、歴史作家・葛城明彦さんに「“江戸近所”の新旧対決〜豊島一族と太田道灌の合戦」と題して講演をしていただいた。講演の中には当サークルで既に訪れた場所もしばしば出てきて、そのときを思い出したりしながら講演を聞いた。参加者70人。

9月24日(日)豊島氏勢と対立した太田道灌が最初に攻撃したとされる練馬城の跡など豊島園周辺をめぐった。前回講演をしていただいた葛城明彦さんの解説を聞きながらの見学となった。豊島園駅に集合、まず練馬城址の詳しい説明を聞いた。鎌倉みちを少し歩き「十一ヶ寺」を見学、特に九品院の蕎麦喰地蔵に参拝した。以下、白山神社、阿弥陀寺、谷戸集落跡、栗山(練馬城出城伝説地)、トーカン山(道灌陣城伝説地)、内田家屋敷林、春日神社、尾崎遺跡(春日小学校資料館)、練馬城西の谷、どんぶり坂、向山庭園などをめぐり、見学して解散した。参加者36人。

9月28日(木)1回目と同じコースを巡った。参加者40人。

◆文士散歩(旧名：文士達を巡る会)

9月16日(土)「谷根千」〈森鷗外〉を巡るの1回目。明治・大正時代からの下町風情を残す谷中・千駄木、その町を森鷗外の生涯に思いを馳せながら歩いた。西日暮里駅から道灌山、高村光太郎碑、諏方神社、浄光寺、富士見坂を経て谷中銀座を通り、千駄木に入る。むじな坂、きつね坂、狸坂、起伏が多い地形は昔から変わらない。高村光太郎、宮本百合子等の旧居跡を通り、大正8年に近代和風建築として建てられて以来震災や戦禍を免れ建築時のまま現存する旧安田楠雄邸に立ち寄る。講談社発祥の地、団子坂を上って青鞜社発祥の地を巡り森鷗外記念館に入館、文豪鷗外の作家活動や人となりに触れた散歩であった。参加者13人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班『大伝馬町名主馬込家文書』

馬込家文書「旧記」第4冊目は上水・下水・橋(主に出金分担割合のこと)。第5冊目は土地(会所新道のこと、本銀町から小伝馬上町にかけての蔵地始末のこと、湯屋新規開業につき障り有無返答書のこと等)。第6冊目は金銀銭(両替屋員数600人に限ること、享保の新金銀通用のこと、日済・車銭のこと等)。最後の第7冊目は家財書上・祭礼(遠島に処せられた勘解由家守ほか欠落人闕所諸道具のこと、御畳人足のこと、神田祭・山王祭を勤める町名のこと、元文5年奥州出羽湯殿山「おたけ大日如来」湯島にて初めての出開帳のこと等)が記録されている。「おたけ」は馬込家先祖が召し使っていた者故、まずその本尊を当家玄関に据え、その後湯島天神に移し、開帳したと記されている。

友の会めも(開催日と人数)

平成29年8月〜9月

◆役員会8月8日(火)17人。9月12日(火)15人。◆事業部会8月1日(火)26人。9月5日(火)23人。◆広報部会8月22日(火)12人。9月19日(火)10人。◆総務部会8月29日(火)22人。9月26日(火)16人。◆古文書講座 入門編：9月6日(水)午前91人・午後90人。初級編：9月20日(水)午前80人・午後77人。中級編：9月23日(土)午前49人・午後27人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト8月3日(木)A班9人。9月7日(木)A班8人。B班5人。9月21日(木)A班9人。B班6人。

コムラサキシキブ
カット：國定美津子さん

第９回　えど友研究発表会（平成 29 年８月１日）

利根川東遷と町火消の役割について２氏が発表

「えど友研究発表会」は今年で９回目になりました。今回は，土屋さんが「江戸の繁栄を築いた利根川東遷について」，若松さんが「江戸町政における町火消しの役割」について発表しました。参加者は103人でした。

江戸の繁栄を築いた利根川東遷について

土屋献一郎さん

数年前に埼玉県の栗橋に転居しました。栗橋について調べますと、すごい歴史がある場所でした。日光街道の宿場町、利根川の中心的な河岸がありました。

利根川東遷のイメージは、「当初、利根川は東京湾(江戸湊)に流出していたが、それを、江戸時代に銚子から太平洋に流出させた」というものだと思います。律令時代の国境は川や山でした。古代の利根川は、武蔵国、上野国、下総国の国境を流れていたと推測します。利根川東遷によって、この国境が変化し、川の向こうに町が移ったりしました。

「利根川東遷」は、昭和18年(1943)刊行の『利根川治水史』(栗原良輔著)の中で初めて使われました。栗原さんは、治水史の立場から洪水箇所を修復するとその結果はその下流で洪水を引き起こす。そこで、下流の工事をすると更にその下流で洪水を起こす。その工事の結果、江戸湊に流出していた利根川の流れが銚子から太平洋に流出するようになった。この工事を幕府が政策的に行ってきたというのです。

栗原説によれば、利根川東遷工事は、第Ⅰ工事(文禄３年・1594、会(あい)の川の締切)、第Ⅱ工事(元和７年・1621、赤堀川の開削)、第Ⅲ工事(寛永18年・1641、権現堂川の開削、逆川(さかさがわ)の開削、江戸川の開削)、第Ⅳ工事(承応３年・1654、赤堀川の通水)に分けられ、60年かけて完成しました。これらの川は全て利根川です。江戸時代までは、地域によって川の名前が異なっていました。

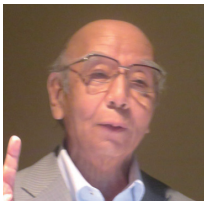
赤堀川の開削は、１km 足らずに33年間も費やしました。ここは上総台地と呼ばれる硬い岩盤層で、発破も一部使われたと思いますが、手掘りで行われました。最初は10間(18ｍ)の幅で開削しましたが通水せず、幅を３間増やしても通水せず、さらに27間まで広げ、深さを8.7ｍにしてようやく通水させることができました。

奥州街道にあった栗橋宿は、利根川東遷工事の関係で３km 上流の日光街道に移転し新栗橋と呼ばれ、奥州街道にあった栗橋を本栗橋と呼ぶようになりました。その後、新栗橋が発展すると新栗橋を栗橋宿と呼び、本栗橋は元栗橋と呼ばれるようになりました。

東遷事業の目的は、江戸を利根川の水害から守り、新田開発を推進すること、舟運を開いて東北と関東との交通・輸送体系を確立することなどに加えて、東北の雄、伊達政宗に対する防備の意味もあったといわれています。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸町政における町火消しの役割



若松謙二さん

皆さんは江戸の三男(おとこ)という言葉をご存知ですか？それは「与力　相撲　火消しの頭(かしら)」で、江戸っ子に大変人気のあった江戸を代表する人たちです。町火消しの始まりは享保３年(1718)、８代将軍吉宗が町奉行大岡忠相(ただすけ)に命じて設置させた町方の自衛消火組織組合です。「火消しは火事のない時は何をしているのか？」と聞かれたことがあります。火消しは町奉行から指示された役目で、本業は日常いろいろと忙しく立ち働く仕事師なのです。

昭和の初め、「関口亀次郎聞書」という史料があり、鳶頭である自分の祖父と父から聞いたことを書き残しています。この関口亀次郎は戦前戦後に活躍した松竹の俳優佐野周二さんの父であり、今、テレビキャスターの関口宏さんの祖父に当たります。彼は神田一番組よ組の鳶頭で全身に彫り物をしており、「江戸彫勇会」の会長でもありました。その聞書によると、ふだんの仕事は町内の上下水道の管理、清掃、井戸替え行事を担当していました。ですから江戸の町の下水路や道路は非常に整備されていました。

また建築現場での仮設、足場組み工事は鳶頭の本業でした。当時の鳶人足の足場を掛ける技は実に驚くほどで、足場から足場へ２間(3.6ｍ)、後ろ向きでも１間を飛んだといいます。

そして江戸の四季の各行事は数十もあり、その段取りを鳶頭に依頼します。中でも年末の正月飾りは鳶頭の専業であり、神社、大名や旗本、大店に出入りする頭は目の回るような忙しさでした。

天下祭りといわれた山王祭と神田祭はともに将軍家上覧の名誉ある祭礼でした。江戸の祭礼は、山車の組立、進行の段取りなど、すべて鳶頭の協力なしには行えませんでした。また、江戸は凶悪な犯罪の非常に少ない、自主的な治安維持都市でした。これは町火消しが町の治安をしっかり管理していたからです。揉め事の仲裁役にも町内に睨みの利く鳶の頭が呼ばれました。火事場で体を張っている火消しの頭は住民から尊敬されていました。江戸の基本的な消火方法は破壊消防です。自身番に組の火消しが集合、火元に向かいます。一番先頭の纏を「はな纏」といいます。自分の後ろに立っている纏が屋根から下りないうちは、足元が燃えていても先に下りません。町火消しは意地と張りの世界です。一番組い組の伊兵衛、十番組を組の新門辰五郎など、江戸では多くの鳶頭が活躍していました。

【記録】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・前田太門

第179回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年8月19日）

錦絵とかわら版にみる、お江戸の時事

講師　富澤　達三さん（松戸市立博物館学芸員）

大江戸の錦絵

江戸の町が拡大して読書人口が増えて出版業が盛んになると、上方に頼っていた出版物も江戸で作られるようになります。本の挿絵や一枚絵を描く職人も増え、彼らは大名に仕える御用絵師に対して町絵師と呼ばれました。明暦３年(1657)の大火(振袖火事)で、江戸は焼け野原となり、新たな町づくりが進むなか「浮世」が流行語となります。この語には「火災後のつらい世をうきうきと過ごそう」「当世風」「好色」などの意味がありました。明暦大火後の江戸では大和絵の伝統を踏まえた町絵師による、庶民のための絵画＝浮世絵が誕生します。浮世絵は芝居と遊郭を２大テーマとし、庶民の欲望に応えていきました。

明和期(1764～72)ころ裕福な町人の間で絵暦交換会が流行し、明和２年に鈴木春信は多色摺りの浮世絵版画「錦絵」を生み出します。錦絵は人気が出て量産されて、１枚20文(かけそば1杯)くらいの価格となり、サイズも大きくなって大判(いまのＢ４くらい)が基本となります。一方で錦絵は、江戸幕府ににらまれ、検閲も始まります。松平定信の寛政改革では、喜多川歌麿の美人画が江戸の風紀を乱すとされ、歌麿はついには手鎖となります。しかしその後も葛飾北斎や初代歌川広重など、人気絵師が旺盛に作品を発表していきました。

天保改革と歌川国芳の風刺画

「奇想の絵師」として人気の歌川国芳は、『水滸伝』の豪傑たちを描いた揃物が大当たりして「武者絵の国芳」といわれますが、戯画も得意でした。水野忠邦の天保改革が始まると、錦絵は風紀を乱す贅沢品として細かな統制を受けます。江戸の錦絵出版界が大不況となる中、国芳は天保14年(1843)錦絵「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」を描き、改革で苦しむ江戸庶民の姿を描いたとの風評が立ちます。本作は源頼光の四天王の武者たちの妖怪退治を題材とした「判じもの」で、検閲を通った合法的な出版物でした。あまりの人気に版元は販売を自粛し、密かに高値で売買されたといわれています。

国芳はその後も判じものの錦絵を描き続けたため、江戸町奉行所は隠密に国芳の身辺調査をさせますが、国芳が罪に問われることはありませんでした。版元や国芳は、政治的な話題や時事を盛り込みつつ、何とでも解釈でき、いざというときは言い逃れができる判じものの錦絵を売りさばき、不況の江戸錦絵界に新風を吹き込んだのです。

「かわら版化」する錦絵

江戸幕府は政治批判や巷の事件や噂を錦絵で伝えることを厳禁していましたが、大都市では火事や敵討ち・珍事奇談・異国船接近・地震や噴火などの災害情報は、いわゆる「かわら版」で伝えられました。深く編笠をかぶった二人一組のかわら版売りを描いた図像が残っています。かわら版は①ニュース性を持っている②即製に摺られたものである③無届出版である④有料である⑤紙質が良くない⑥判型が多様である、ことが主な特徴です。

かわら版の出版が増えた弘化～嘉永期(1844～54)、国芳は事件を戯画で伝える手法を考案します。嘉永２年(1849)、内藤新宿正受院の奪衣婆像がはやり神となって参拝者が押しかけます。国芳は奪衣婆像を秀逸に擬人化し、さらにかわら版風の文章を使った錦絵で、数カ月続いた事件を検閲を通った連作で伝える手法を確立したのです。

八代目団十郎の死絵と鯰絵

嘉永７年、八代目市川団十郎が大坂で自殺し、江戸では追善の錦絵が100点以上も出ますが、多くは匿名で版元不明でした。なかには図像とかわら版風の文章で八代目自殺の原因をあれこれ邪推した作品も出ました。安政２年(1855)には江戸で大地震が起こり、直後から鹿島大明神と地震鯰の伝説に基づいた錦絵「鯰絵」が、無検閲で150種類以上出ます。当初鯰絵の絵柄と文章は、地震の難を避けるまじない風の内容でした。しかし震災復興が本格化し、建築関係の仕事から好景気が盛り上がると、鯰絵は「江戸の復興＝世直し気分」を後押しする内容へと劇的に変化します。鯰絵の絵柄から見て、国芳と弟子たちの関与は明らかです。

おわりに

国芳は天保期に判じものの錦絵で大当たりします。嘉永～安政期になると国芳は、お得意の戯画と、かわら版風の戯文で時事を連作で伝えた錦絵をヒットさせます。江戸では、時事を伝える錦絵は「判じもの」より「戯画もの」が主流になったのです。

レポーターからひとこと

国芳といえば「武者絵」、最近では「猫絵」で人気がありますが、時事を題材にした多くの絵を描いていることに驚かされました。講義の方も時事ネタを盛り込んだ楽しいものでした。参加者108人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成29年８月29日）

荒川区立荒川ふるさと文化館を訪ねる

JR常磐線・東京メトロ日比谷線・つくばエクスプレス南千住駅からコツ通り商店街を歩き、日光街道(国道４号線)を渡って荒川の鎮守素盞雄神社の脇を通り抜けると徒歩８分で４階建ての荒川ふるさと文化館(南千住図書館併設)があります。荒川区の文化財係が母体となって平成10年５月開館しました。14時から地下１階研修室にて亀川学芸員(平成26年11月友の会セミナーの講師)より館の説明がありました。

１階には常設展示室の他に、郷土あらかわに関連した文化財や資料、寄贈されたコレクション類(植村和堂氏の書のコレクション、皆川重男氏の号外を中心としたコレクションなど)を展示紹介する企画展示室があり、定期的に企画展が開催されています。10月28日からは第40回企画展「下町の宝物展」が開催されています。今年５月２日にあらかわ伝統工芸ギャラリーがオープンしました。そこは荒川区の誇るべき文化財である伝統工芸技術の魅力を発信する展示、実演、ワークショップの空間になっています。入り口前には回向院にあった幕末安政の大獄で処刑された橋本左内の墓旧套堂が復元されています。

休憩の後、常設展示室を巡りました。縄文時代の日暮里延命院貝塚のはぎ取り標本、道灌山遺跡の出土品から、この地が暮らしやすい場所であったことが分かりました。中世以降、奥州街道の宿場町、荒川の渡し場として発展していったようです。

江戸時代に入り、日光街道・奥州街道の千住下宿としての発展の他に、火葬寺、仕置き場が置かれた場所、景勝地・名所の地、多くの大名・旗本の下屋敷、野菜の農耕地、鷹場といろいろな荒川の姿がある事の説明を受け認識を新たにしました。さらに古文書、古地図、浮世絵、道具類の実物、レプリカ、ジオラマ、映像検索装置などで分かりやすく展示されていました。明治以降、近代工業の発展の中、下町の町工場の資料展示や昭和41年(1966)夏ごろのくらしと景観を再現した復元家屋に懐かしさを覚えました。

展示室(常設・特別)、伝統工芸ギャラリーとも開館時間は9:30～17:00(休館毎週月曜日)、観覧料は常設展100円、特別展別途、伝統工芸ギャラリーは無料です。

参加者36人。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子

えどはく探訪

ワークショップ「江戸時代の版木で自分だけの江戸からかみを摺ってみよう！」

副題に「夏休み！えどはくで伝統文化を体験」とあるように定員20名は夏休み中の小学生たちで、同伴の保護者も含め、５階ミュージアム・ラボは満員盛況でした。講師の小泉幸雄さんは初代から数えて５代目、数々の受賞歴をお持ちの唐紙師で、たてもの園の「高橋是清邸」の襖などの復元も担当された名工です。体験に先立って襖用唐紙を摺る実演がありました。襖と同じ幅の版木で２度摺りしながら縦に５、６段ずらしていくので、模様合わせに技術を要します。雲母、胡粉などの材

料を水で溶き、刷毛で布を張った団扇状の篩に塗って、版木の表面に絵具をつけていきます。その上に唐紙を置き、両手で優しく撫でていくと模様が摺れてきます。模様は「百花」「竹」「萩」などです。近代以降、技術革新により襖と同じ幅の和紙が生産できるようになったため、現在では襖と同じ幅の版木を用いて唐紙摺りが行われています。

体験では江戸時代に用いられた襖の幅の半分大の版木・唐紙を使い、各自２枚ずつ摺ります。１枚目は２班に分かれての体験で、もう１班は隣接の体験住宅に展示の唐紙の屏風・襖・小物や雲母などを見学します。版木の模様は「龍」か「兎」で、絵具は緑とピンクを好みで選びます。２枚目は全員揃っての体験で「百花」と「波」から選び、金粉の絵具でした。

乾きを早くするため摺りあがった唐紙をスタッフが段々のカゴに差し入れ、団扇であおいでいました。１時間半の体験を終え、貴重な思い出にもなるだろう各自の作品を子どもたちが大切そうに受け取っていました。

【取材】文・写真：広報部会・内匠屋京子

えど東京一景

(7) −旧細川侯爵邸(和敬塾本館)−

東京メトロ有楽町線護国寺駅前から急坂(鉄砲坂)を登ると、目白通り沿いに育英事業を営む和敬塾があります。正門から木立の中の道を進んでいくと、前方にしゃれた佇まいを見せる洋館が現れます。昭和11年(1936)、旧熊本藩細川家の当主護立(もりたつ)侯爵の本邸として竣工された建物で、同31年に和敬塾本館となり、平成10年には東京都指定有形文化財となっています。イギリスのチューダー・ゴシック様式を基調としており、南側の庭から眺めると急勾配の屋根や広いテラスが目を引きます。

建物の1階は主に接客室用、2階は主に日常生活の場として用いられていました。北側玄関の先には、2階まで吹き抜けの大階段を持つ大ホールがあります。周囲には客間・喫茶室・食堂といった洋間が配されていますが、壁紙・家具・床などには和風の意匠が取り入れられています。また、東隅の書斎は「栗の間」と呼ばれ、栗材を多用した荒々しい仕上げが魅力的です。

2階大ホールに接する二つの和室は、黒漆を用いた骨太な意匠と数寄屋風の造りという好対照をなしています。バルコニーに面したサロンでは、植物模様の壁紙、三連アーチ、らせん状の溝を刻んだ栗材の化粧丸柱、化粧梁といった様々な意匠が楽しめます。また、「竹の間」と呼ばれる部屋では、変形して成育された丸竹や広げて張られた竹などの趣向が凝らされ、実に見事です。

建物の内部は通常非公開ですが、月に1、2回のガイド付き見学会(事前申込み制)が開催されており、裏話を交えた詳しい解説を聴くことができます。さらに、同じく細川家下屋敷・抱屋敷の跡地にある永青文庫・肥後細川庭園を併せて訪れ、細川家巡りをするのも一興です。

【取材】イラスト:広報部会・福島信一
文:同・菊池真一

江戸博クリップ

「江戸博の成長」

事業企画課長　飯塚晴美(いいづか　はるみ)

4月にたてもの園から江戸博にまいりました、事業企画課長の飯塚です。江戸博に就職したのは、平成5年(1993)の開館3カ月後です。オープン時は、「下町彩る東京文化の殿堂」「首都に新シンボル誕生」「初日入場者1万2500人」などの見出しで、新聞各紙に大きく取り上げられました。華やかな話題の一方で、働きだしてびっくり！　毎日が慌ただしく、何日も泊り込みで仕事をしている職員も1人や2人ではありませんでした。

その頃から、はや25年になろうとしています。施設の面だけでも、3階江戸東京ひろばの休憩所、5階のミュージアムショップ、現フィンズ・カフェの1階部分、タクシー乗り場、そして常設展リニューアルでの新コーナーや新模型と、開館時にはなかったものが増えています。事業面ではさらに、企画展、ボランティアガイド、ふれあい体験教室、えどはくカルチャー、ミュージアムトーク、国際シンポジウム、お正月開館、両国にぎわい祭りなど大増殖しました。もちろん、江戸博の強力なサポーター「江戸東京博物館友の会」も結成していただきました！　25年の間に、江戸博はなんと成長したことでしょう。

10月から開館以来初めての長期休館に入ります。休館中とはいえ、資料の収集と保管業務は続きますし、来春オープン時の企画展、常設展、教育普及事業、31年度の特別展など、さらに成長した姿をお客様にお見せできるよう、着々と準備を進めていかなくては……。次に江戸博がどのように成長しているか、どうぞ皆様お楽しみに！

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉞

[内藤新宿から永固山一行院]

太宗寺の銅造地蔵菩薩坐像

今回は江戸四宿の一つであった内藤新宿と鮫河橋の辺りを巡ります。歩いたのは、まるで梅雨に逆戻りしたような天候の８月上旬から中旬でした。

内藤新宿

東京メトロ丸ノ内線の新宿御苑前駅で下車。目の前の新宿通りはかつての甲州道中(甲州街道)で、通りの両側には第一の宿場である内藤新宿の町並みが続いていました。「内藤」の名は信州高遠藩内藤家の領地を町人地としたことによります。挿絵の「四谷内藤新駅」には師走の風景が描かれており、味噌の御屋・荷運び・餅つき・宿場女郎屋・門付け・野菜の振り売りなど宿場の賑やかな様子が伝わってきます。そんな景色を思い浮かべつつ通りを東へ歩き、四ツ谷区民センターの手前を右に折れると、新宿御苑大木戸門の手前に「内藤新宿開設三百年記念碑」がありました。元禄11年(1698)の開設から300年を経た平成10年(1998)に建立されたもので、隣には信州高遠城址公園から「高遠小彼岸桜」が移植されています。ここから新宿三丁目駅の辺りまでが内藤新宿の範囲でした。南側にある新宿御苑の半分ほどが内藤家下屋敷跡で、屋敷内にあった池が現在も玉藻池として園内に残されています。

霞関山太宗寺から護本山天龍寺

新宿通りを西へ戻り途中の交差点を右折すると、内藤家の菩提寺であった霞関山太宗寺があります。門を入ってすぐ右手にある銅造地蔵菩薩坐像は江戸六地蔵の一つです。六地蔵の３番目として、正徳２年(1712)に造立されました。隣の閻魔堂には閻魔像(内藤新宿の閻魔)と奪衣婆像(しょうづかのばあさん)が祀られています。金網の扉の中は薄暗いのですが、１分間点灯のスイッチがあり、はっきりと姿を拝むことができました。また、奥の本堂の脇には切支丹灯籠が立っています。内藤家墓所から出土した繊部型灯籠の竿部を元に復元したもので、全体の形状は十字架を、竿部の彫刻はマリア像を象徴しているとされます。この他境内には、内藤正勝の墓・三日月不動尊・布袋尊像・塩かけ地蔵など見どころがたくさんで、ちょっとした博物館のようです。

▲長谷川雪旦：四谷内藤新駅

さらに西へ進んで明治通りを左折した先に、護本山天龍寺があります。山門は唐破風のある重厚なもので、歴史を感じさせます。境内の鐘楼には内藤新宿に時刻を告げた「時の鐘」が下がっています。当初の梵鐘は元禄13年に常陸笠間藩主牧野備後守貞永より寄進されたもので、現在の鐘は明和４年(1767)に鋳造された３代目です。この鐘は、内藤新宿で夜通し遊興する人々を追い出す合図として「追い出しの鐘」と呼ばれていました。また、この辺りは武士が江戸城に登城するのに時間がかかるため、明け六つの鐘を少し早く突いたといわれます。時刻の元となったのが、現在の鐘と同年に牧野成貞より寄進された「やぐら時計」で、寺務所の中に展示されています。ここから明治通りを引き返した新宿三丁目交差点が元の追分で、ここで青梅街道と甲州街道が分かれていました。

鮫河橋から永固山一行院

新宿三丁目駅から丸ノ内線に乗り、四ツ谷駅前から外堀通りを渡って、赤坂迎賓館方面へ歩きます。やがて右に学習院初等科、左に迎賓館正門が見える辺りから鮫河橋坂の下りとなります。美しい緑のトンネルと石垣のある心地よい坂です。坂の名はこの先に架かっていた鮫河橋によるもので、この一帯の地名にもなっていました。大昔はこの辺りまで入り江になっていて、鮫が泳いできていたとも、雨が降ると川が増水したため「雨ヶ橋」と称されたともいわれます。坂の右手にある「みなみもと町公園」の中を通り抜けると西脇に小さな祠があり、「鮫ヶ橋せきとめ神」と「四谷鮫河橋地名発祥之所」の石碑が立てられています。坂へ戻った向かいの赤坂御用地鮫が橋門が橋のあった所で、下を流れる鮫川(桜川)は紀州藩中屋敷(現赤坂御用地・迎賓館)を横切って赤坂溜池へ注いでいました。

さらに進んで安鎮坂のＹ字路を右に入ると、千日谷と呼ばれた低地に至ります。北側にある永固山一行院の寺号が千日寺であったことが由来です。かつては寺の南側に千日坂がありましたが、その後消滅して新たに造られたのが、寺の脇を上る現在の千日坂です。坂を上っていくと一行院は工事中で、坂に面した舎利塔の周りには工事用ポールが張り巡らされていました。奥には、丸瓦の細長い屋根と白木の立板を並べた壁面のモダンな建物があります。元あった「千日谷会堂」を建築家・隈研吾の設計で最近建て替えた「千日谷浄苑」です。中には本堂と納骨堂があり、本堂はホールになっていて本尊の釈迦如来像を間近に拝観できます。寺を出るとＪＲ信濃町駅は目の前で、駅前の歩道橋からは舎利塔の全体像を見ることができました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

友の会カードは休館中でもこんなに使える！

～東京都歴史文化財団各施設での特典一覧～

「入会のご案内」に記載されている「東京都歴史文化財団各施設での特典一覧」の詳しい内容は下記の通りです。

当館の休館中（平成 30 年 3 月 31 日まで）でも他施設の特典は引き続きご利用になれますので、存分にご活用ください。

○各施設に入館の際は、受付で「会員証」をはっきりと提示して、有効期限などの確認を受けるようにお願いします。
○ミュージアムショップやレストランなどでの支払いの際も同様です。
○会員証を忘れた場合、下記の特典は受けられませんのでご注意下さい。

施設名	常設展	企画展（※１）	ミュージアムショップ	レストラン カフェ	その他
江戸東京博物館	改修工事のため平成30年3月31日まで全面休館中				
	無料	特別展（※２）一般料金半額 同伴者２割引（１人限定）	5%引き（一部商品を除く）	１０%引き	• えどはくカルチャー２割引 • ホールでのイベント割引 • 墨田区観光協会（１階のショップ）５%引き
江戸東京たてもの園	入園料一般料金２割引	（入園料で入場可）		（右記）	• たべもの処「蔵」100円返金割引（うどん・弁当・カレーライスのみ） • デ・ラランデ邸内「武蔵野茶房」飲食代５%引き
東京都写真美術館		一般料金２割引		ランチメニュー注文時にドリンクを１杯サービス	１階ホールでの上映割引（上映によって割引の有無および率が異なる）
東京都美術館		団体割引料金適用		５%引き	
東京文化会館				５%引き（会員本人に限る） ※２階レストランのみ（カフェを除く）	匠音～タクト～（新ショップ）５%引き
東京都庭園美術館	（庭園）一般料金２割引	一般料金２割引		５%引き	
	エレベーター設置工事のため平成29年11月17日まで全面休館中				
東京都現代美術館	改修工事のため全面休館中（平成30年度中リニューアル開館予定）				

※１：「企画展」とは各施設主催の展覧会を指します。外部団体が貸しスペースで行うものは含まれません。
※２：平成30年度中の特別展開催はありません。

催事案内

古文書講座

各編とも来年１月から第３期を開講

各期、改めてお申込みいただくことになっておりますのでご注意ください。自動継続ではありません。会場は引き続き下記の通りです。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／10(水)、２／７(水)、３／７(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／17(水)、２／21(水)、３／14(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：１／20(土)、２／24(土)、３／24(土)

- 時間：各講座とも、午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
  (注意)各講座とも、午前の講座か午後の講座かの希望を明記してお申込みください。
- 会場：**各講座とも飯田橋・新陽ビル４階「リロの会議室　会議室Ａ」**
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- **参加費：各講座とも全３回2,400円(初回１回払い)**

・申込締切：各講座とも11月30日(木)必着

◆第２期の残日程

入門編11／１(水)、初級編11/22(水)、中級編11/25(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

見学会

九品仏浄真寺と等々力渓谷

◆国分寺崖線(多摩川が武蔵野台地を削ってできた河岸段丘)の南端の台地部分を巡ります。ここは古くから人間の営みと深い関わりがあり、「古代の有力者の墓＝野毛大塚古墳」「中世の城跡に建てられた寺院＝九品仏浄真寺」「23区唯一の渓谷＝等々力渓谷」などの多様な側面を持つ地域です。自然と歴史の両面から東京の来歴を学ぶことのできるコースをお楽しみください。

【一部区間で電車利用、等々力駅→九品仏駅間、130円】

【コース最後の九品仏浄真寺のみ集印可】

- 開催日：12月10日(日)受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　　受付終了：12時45分
- 集合と解散：東急大井町線「上野毛」駅正面改札出口集合／東急大井町線「九品仏」駅解散／所要時間は約３時間
- 申込締切：11月30日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

都内で一番古く、充実した“谷中七福神”をめぐる！

◆元旦から７日までの間に七福神を祀る社寺を巡拝してその年の福運を祈願する行事です。行程は田端駅に集合して東覚寺(福禄寿)→青雲寺(恵美寿)→修性院(布袋尊)→天王寺(毘沙門天)→長安寺(寿老人)→護国院(大黒天)→不忍池弁天堂(弁財天)と巡り不忍池弁天堂前で解散とします。谷中七福神めぐりは享和年間(1801～1804)に始まったとされ、北・荒川・台東の３区にまたがる約3.5kmの行程で、神社は入っておらず寺院だけで７カ所の七福神詣です。谷中七福神も「恵比寿・大黒：神田明神・上野清水堂」「大黒：日暮里の経王寺」「毘沙門天：谷中の本通寺」等々とすることもあったようです。

新年早々、七福神をめぐって晴れ晴れとした一年間を過ごしましょう。 なお、申し込みはお早めに！

- 開催日：１月７日(日)受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　　受付終了：12時45分
- 集合場所：JR山手線・京浜東北線「田端」駅北口改札出口
- 申込締切：12月21日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

催事のお申込方法

◆**普通はがき(62円)**に、
①催事名(略名可)・開催日　②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第100号
平成29年11月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：早川良躬(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910